慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	コーリン・ リーガム著『パン・ アフリカニズム』
Sub Title	C. Legum : Pan-Africanism
Author	小田, 英郎(Oda, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1963
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.36, No.3 (1963. 3) ,p.122- 128
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19630315-0122

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

天津条約編については特に今回発表されたという文書は見当らないが、「秘書類纂」等の誤りを直し、関係資料が列挙されているだけでも本編の価値はある。

しかし紙数の関係からか、貴重な文書で収録されていないものが若干あるのは残念である。例えば「日本外交文書」十七巻に『明治十七年甲申朝鮮京城事変始末書』があるが、この文書が『朝鮮京城事変始末書』の前半の部分のみで肝心の部分がない点から、外交文書の不足を補うためにもこれを取上げていただきたかつたこと、また山辺健太郎氏が発見され、既にそれを用いて論文をも書かれた（『日清天津条約について』アジア研究七巻二号）写本『朝鮮交渉事件録』を紹介していただきたかつたこと、これは「隴を得て蜀を望む」ことであろうが、次の機会にお考え置きいただきたい。

附録には伊藤博文より井上馨宛、同黒田清隆宛、井上角五郎より井上馨宛各書翰と、榎本武揚より井上馨宛報告（黒田家文書）の計九つの文書が収められ、明治十六年に遡つて日仏同盟について駐清英、仏両公使と榎本駐清公使の対話の模様等を知り得る。

巻末の十二ページにわたる解説は、壬午の変後から天津条約の締結に至る過程を簡単に跡付けており、本書を利用する研究者にとつてこれまた大変便利で、有用なものとなつている。

ともあれ、本書は以上述べて来たところから明らかなように日韓関係史の研究を志すものは勿論、朝鮮半島をめぐる国際関係史に関心を持つものは必ず参照を余儀なくされる根本資料集の一つであることは疑いない。文書の蒐集、編纂は労多くして報われる所少いことであるが、学問の発展のためには欠くべからざることであり、ここに先人の業績を越えて前進することも可能となる。この点編者、監修者および資料の発掘、公表の段階において協力された蔭の方々に深く敬意を表する次第である。監修者田中教授は序文において「今後も、朝鮮の開国から日韓合併に至るまでの稀少資料を次ぎ次ぎに刊行される心算」であるといつておられる。その過程には多くの困難と非常な努力が必要とされるであろうが、外交史学界、国史学界、東洋史学界等専攻分野を問わず協力を惜しまず、本資料の一層の充実と完結を急がせたいものである。（巌南堂発行　四九〇ページ　三〇〇〇円）

（池井　優）

Colin Legum: Pan-Africanism
A Short Political Guide
Pall Mall Press, 1962, 296 pp.

コーリン・リーガム著
『パン・アフリカニズム』

一　パン・アフリカニズムは、ときにはナショナリズム、トライバリズムとともにアフリカの政治運動を規定する三大潮流の一つに

かぞえられ、またときには現代中立主義のアフリカ的基盤として理解され、さらにはまたバルカン化された現状を克服しつつ近代化をおしすすめるための指導的理念として受けとられている。いわばパン・アフリカニズムは、対内的にはアフリカの綜合的近代化促進のための嚮導原理であり、対外的にはアフリカの自己主張の理念的発現なのである。したがつて現代アフリカの問題は、抽象的次元においてはすべてパン・アフリカニズムのワク内で解決の方向をみいだそうとしているといつても過言ではないであろう。しかしそのような漠然たるコンセンサスはあつても、具体的な問題の処理にあたつては、国によりあるいは指導者により、嚮導原理としてのパン・アフリカニズムの具体的適用ないし解釈が異つてくるのは当然である。かくて、「アフリカの統一」という抽象的原理の実践をめぐつて、現代のアフリカはまさに「百家争鳴」的状況におかれているのであり、それだけにパン・アフリカニズムの、運動としての具体性を捕捉し整理することは困難になつてきている、といわなければならない。そうした観点からみるとき、ここに紹介する「パン・アフリカニズム」は、半世紀以上にわたる同運動の発展過程を極めて要領よくあとづけているばかりでなく、現代にいたつていちじるしく多元化的傾向を示している同運動に対して一応交通整理の役をはたしえていることから、かなりたかく評価されてもいいであろう。ただ、副題が示しているように、本書はあくまでも「ガイド・ブック」であり、しかも著者の意図が「自説を展開することなしに、できるかぎり客観的に記述する」(一三一頁)ことにあるため、かならずしも問題点を多くふくんでいるとはいえない。しかしわれわれは、この場合あくまでも著者の設定したワクのなかで本書を評価すべきであろうし、また、数少いパン・アフリカニズムの基本文献の一つであるジョージ・パドモア(George Padmore)の「パン・アフリカニズムか共産主義か?」(Pan-Africanism or Communism?, the coming struggle for Africa, 1956.)が、実際に運動に参加した黒人の体臭をかなりつよくにじませているのと対比して考えれば、客観的記述に徹しようという著者の意図自体も有意義なものとして受けとられてよいのではなかろうか。

著者コーリン・リーガムは、イギリスにおける現代アフリカの研究家として、数冊の代表的著作とともにあまりにも有名である。

なお本書は二部からなつており、第一部では、西インド諸島(とくにジャマイカ)、アメリカの黒人運動として発生し、西ヨーロッパ、アメリカで発展し、こんにちアフリカで花をさかせようとしているパン・アフリカニズムの歴史的あとづけをおこない、第二部では、関係会議の決議・宣言をはじめ二五にのぼる資料を収録・提示している。以下本書の構成を目次で示しておこう。

第一章　パン・アフリカニズムの萌芽
第二章　その分散的成長、一九〇〇～一九五八
第三章　アフリカへの回帰、一九五八～一九六二
第四章　アフリカ諸国の再集団化
第五章　アフリカ労働者の分裂
第六章　文化と政治・黒いオルフェの分裂

第七章　現代の政治理念
第八章　結論
附編　資料

二　第一章の冒頭で、著者はケニヤの有力な指導者であるトム・ムボヤの言葉を引用しつつ、パン・アフリカニズムの自己中心的な性格をうきぼりにする。「西欧もソ連も同じ眼鏡でアフリカをみている。親西欧か、親共かという二分法の眼鏡である。しかしこれではアフリカの現実を理解することはできない。アフリカ人は親西欧でもなければ親共でもない。かれらは親アフリカなのである」。こういったかたちの自己主張が、アフリカの指導者たちの双面神的な姿勢をうむのであるが、著者によれば、アフリカの利益こそ最高のものであるというかれらの確信は、まさにパン・アフリカニズムの性格そのものをあますところなく示したものである（一三～一四頁）。ところで、こうした性格をもつパン・アフリカニズムの本質はいったいどのようなものであろうか。著者は、実践的側面においてはそれは指導原理として解釈することも可能であるが、本質的には「理念と情緒の運動」であると規定し、一種の弁証法的発展過程をたどるがゆえに、ある意味では社会主義や世界連邦にもたとえられるが、本来排他的な性格をもつところから、他のすべての運動と区別されなければならないとのべている（一四頁）。しかし、しいて類似性をもった運動をもとめれば、それはユダヤ人のシオニズムである。類似点としては、いずれも故国ではじまったものではないこと、人種的な努力の集中化と人種的源泉の認識とを目指していたことがあげられる（一四頁）。

ついで著者は、どのような情緒的要素がパン・アフリカニズム理念の根元をつくりあげていったかを、黒人の詩や文章を豊富に引用しつつ明らかにする。以下それらの情緒的要素を列挙すれば、

一、異国での流浪の哀感
二、西欧に対する愛憎
三、黒人の連帯感
四、劣等感
五、劣等感の排除・皮膚の色に対する誇り
六、失われた過去への感慨
七、アフリカの個性

となる（一五～二一頁）。これらの諸要素の共通分母は、エメ・セゼールのいわゆる「植民地的、半植民地的ないし擬似植民地的状況がもつ影響力」に対する有色人種の反乱であった（二一頁）。こうして徐々に形成されていったパン・アフリカニズムは、一九〇〇年にパリで開催された第一回パン・アフリカ会議を契機として、具体的な運動のかたちをとって登場してくるのであるが、第二章では、一九〇〇～一九五八年までの運動の流れが概観される。この間にあって第一回パン・アフリカ会議を主催したトリニダッド出身の弁護士H・シルヴェスター・ウイリアムスの功績は無視しえないが、最高の指導者となれば、アメリカ生れの混血ニグロであるデュボア博士に指をくつせざるをえない。かれこそはパン・アフリカニズムの文学的潮流と政治的潮流とを接合させた人物だからである（二四頁）。

かれは「有色人種向上のための国民協会」（NAACP）を組織し、パン・アフリカニズムの出版物「危機」を編集し、権利の平等をさけんで積極的な闘争を展開した（二五頁）。これに対してジャマイカ出身の黒人マーカス・ガーヴェイは、一九二〇年代にアメリカで「アフリカにかえれ」運動を展開してデュボアと対立した（二六頁）。こうして、この時期の前半は西インド諸島、アメリカにおいてパン・アフリカニズムの理念がつちかわれ、その理念はパン・アフリカ会議を通じてヨーロッパに、さらにアフリカ人学生を通じてアフリカに伝達されたのである（二六～二七頁）。この間パン・アフリカ会議は第二回―一九一九年パリ、第三回―一九二一年ロンドン・ブラッセル、第四回―一九二四年ロンドン・リスボン、第五回―一九二七年ニューヨーク、と比較的ひんぱんに開かれたが、とくに第四回会議にはH・G・ウェルズ、H・ラスキ等も出席し、ラムゼー・マクドナルドのメッセージがよせられるなど、西欧知識人・政治家の関心もつよまつてきた（二九頁）。

さらに一九三六年以後になると、パン・アフリカニズムの舞台はイギリスにうつり、共産主義から転向してコミンテルンと手をきつた黒人G・パドモア、G・L・R・ジェイムス、およびシェラレオネの労組指導者ウォーラス・ジョンソン等を中心に運動がすすめられることとなつた（三〇頁）。この時期から第二次大戦にかけて、パン・アフリカニズムは転機をむかえ、黒人のインテリたちがヨーロッパの政治理論や政治制度――自由主義・社会主義・共産主義・無政府主義・ファシズム等――を詳細に研究しはじめるとともに、自国のナショナリズムの実践化に着手するにいたつたのである（三一頁）。

第二次大戦終結直後の一九四五年十月マンチェスターで開かれた第六回会議は、パン・アフリカニズムをさらにいちど脱皮させた。すなわち、「アフリカの黒人」の勢力がつよくなつたのである。むろんデュボア博士を中心とするアメリカの黒人、パドモア、ジェイムスなど西インド諸島黒人の勢力も存在してはいたが、エンクルマ、ケニヤッタ、ウォーラス・ジョンソンをはじめとするアフリカ黒人の占める比重の増大は注目すべきものをもつていた。かくて運動方針そのものも、従来の受動的なものから積極的なものへと変化していつたのである。著者はここで、パン・アフリカニズムの理念の成長を示す指標として、「一人一票＝普通選挙」の要求、「経済的デモクラシーこそ真のデモクラシーである」という主張、「私的利潤の追求のみを目標とした私有財産・私企業の支配」に対する非難、「バンドン精神」の承認等をあげている（三一～三二頁）。かくて、パン・アフリカニズムは黒人インテリやアフリカ人留学生のたんなる観念の所産ではなくなり、アフリカの土壌に移植されて誇りと力と独立をとりもどすための指導原理へと発展した（三三頁）。これ以後一九五五年のバンドン会議を通じてアジア諸国と、一九五七年の第一回アジア・アフリカ連帯会議を通じてそれを主催したエジプトと、それぞれ精神的なつながりをつくりあげたが（三九～四〇頁）、パン・アフリカニズムが名実ともに完全にアフリカの土壌に移植されたことを象徴するものとしては、一九五八年にガーナの首

都アクラで開かれた第一回アフリカ諸国会議をあげなければならない。同会議に参加した八カ国のうちブラック・アフリカはガーナ・リベリアの二国にすぎなかつた（当時それ以外に独立国は存在しなかつた）が、これによつて、サハラ砂漠という自然的障壁・文化的異質性などをのりこえ、北アフリカのアラブ諸国とともに「アフリカの統合」へすすむきつかけをつくりあげたのである。かくてアフリカは統合のための中核をえたばかりか、同会議が大陸の解放を宣言したことによつて、反植民地主義闘争に対して内部からの支援をあたえうることとなつた。また「アフリカの個性」を対外的に主張することによつて「アフリカ的ノン・アラインメント政策」をうちだしたのもこの会議であつた（四一～四二頁）。その後も同会議は、第二回―一九六〇年アジズ・アベバ、第三回―一九六一年ブラザビル、第四回―一九六一年カサブランカ、第五回―一九六一年モンロビア、とつづけて開かれている。このほか非政府的なレベルでの組織として、全アフリカ人民組織（AAPO）が一九五八年にアクラで結成され、「アフリカ自由諸国共同体」を究極目標として活動している（四二～四三頁）。

しかし、こうしてアフリカの土壌に移植され、具体性が要求されてくると、その解釈・実践をめぐつて、アフリカ内部に分裂が生じてくる。一九六〇年十月に旧仏領アフリカ諸国があつまつて開いたブラザビル会議は、決定的分裂の端緒をなすものであつた。同会議の具体的な議題はアルジェリア問題、コンゴ問題、モリタニア独立問題等であつたが、これに刺激をうけて翌一九六一年一月にモロッコの主催でガーナ、ギニア、マリ、アラブ連合、リビア、アルジェリア臨時政府の代表が出席してカサブランカ会議を開き、同様の議題をめぐつて結束をかためた。一方ブラザビル派はリベリア、ナイジェリア、それにカサブランカ派から離脱したリビア等八カ国をくわえて、一九六一年五月モンロビア派を結成し、以後、こんにちにいたるまで、カサブランカ、モンロビア両派はアフリカを二分したかたちで対峙している。アフリカの統合というもつとも重大な問題についての両派の基本的態度はどうかといえば、モンロビア派が「現在あるアフリカの主権国家を政治的に統合してしまうことではなく、アフリカの連帯という点からの、希求と行動の統一をもたらそう」と考えているのに対して、カサブランカ派は「アフリカ諸国の有効な協調形態をつくりだそう」という、一歩すすんだ主張を展開している（五六頁）。しかし両派に属している国の指導者たちがすべて同じ見解をわかちもつているわけではない。たとえばカサブランカ派内部でも、「いまただちに強力な政治的統合が必要であり、単一の連邦政府のもとに統一されなければならない」というエンクルマの主張と他の指導者の主張とのあいだにはかなりの距離がある（五七頁）し、モンロビア派に属するオクパラの「アフリカ連邦」論も、アフリカの統合について相当明確な線をうちだしている（五八～五九頁）。さらに著者は一応の整理をあたえる意味で両派の性格分析をこころみる。それによるとカサブランカ派は「民主主義的中央集権主義の理念をかざした革命家のグループ」であり、モンロビア派は「漸進的な改良主義者」からなつている。改良主義者たち

は、民族主義運動の段階では急進的であるが、独立を達成したとなればもはや急速な社会的・経済的変革をおこなおうとはしない。したがつて、アフリカの政治的、経済的、社会的近代化のすべてを「統合」を通じて早急に達成しようとする「統合論者＝革命家」を国際派であるとすれば、改良主義者は国内派である。かれらは革命家に対抗するためにモンロビア派を結成したにすぎない（六二～六三頁）。しかし、著者はこうした類別法が絶対ではないとのべ、現代アフリカのいちじるしい流動性をその理由にあげている（六三～六四頁）。

第四章では、これまでにすすんできたアフリカの地域的再統合化がとりあげられる。現在アフリカは五六の部分からなつているが、これがアフリカ人に「帝国主義者によるバルカン化」として受けとられ、それを克服するために多くの地域的再統合化がすすめられてきた。著者によれば「分立は損であり、地域的統合化をおしすすめねばならない」という点に関しては指導者たちの間に一致があるが、ただその方法をめぐつて対立が生じているのである（六五～六六頁）。以下著者があげている地域的統合化の具体例を列挙すれば、北アフリカの「マグレブ連邦運動」、「ナイル諸国連合」、「大ソマリア運動」、東アフリカ、中部アフリカの「東部・中部パン・アフリカ運動」、西アフリカの「ガーナ・ギニア・マリ連合」、旧仏領の「アフリカ・マルガシュ連合」となる（六七～八〇頁）。

ついで第五章ではアフリカ労働組合の動きが概観される。パン・アフリカニズムが一九五八年にアフリカに回帰していらい、その「階級版」ともいうべき「全アフリカ労働組合連合」がただちに結成されたが、ここでもやはり具体的方策をめぐつて対立が生じ、現在同連合はアフリカ労働組合勢力の一分派を代表しているにすぎない状態におちいつている（八一頁）。ここで著者にしたがつて一応アフリカ労働組合運動の流れを追つてみると、まず一九五六年以後の時期においては、セク・トゥーレを指導者とする「黒人アフリカ労働組合総評議会」が国際自由労連、世界労連、国際キリスト教労連等の影響力を排除しつつ、「アフリカの個性」を十分にもつた労働運動を展開しようとした点が特徴的であり（八一～八二頁）、一九五七年は国際自由労連が世界労連の勢力を排除しつつ各地域に支部をおいてアフリカ労働組合へのくいこみに成功した年であり、一九五九年以降は、ノン・アラインメントの解釈などをめぐり全アフリカ労働組合連合が分裂した時期である（八三～八八頁）。こうした内部分裂はその後ますます尖鋭化する傾向を示している（八八～九一頁）が、くわえて一九六二年一月にはセネガル、チュニジア、ケニアの労働運動指導者が中心となつてアフリカ労働組合連盟が組織され、アフリカの労働運動はますます複雑化する傾向をみせはじめている。

第六章では、文化と政治との関係が紹介される。著者はまず一九三〇年代初期にパリを中心としてもりあがつたパン・アフリカ文芸運動が、マルクス主義とシュールレアリズムの混合であつた初期の段階から、やがてより精緻化された「黒人文化運動」へと脱皮していつた過程を要約し（九二～九四頁）、さらにそれが一九五九年以後

の「黒人作家芸術家会議」として結実した事実を指摘する（九六頁以下）。同会議の宣言は「ヨーロッパ世界と黒人世界、およびそのおのおのがもつ対立的要素のあらたなる綜合」を要求している（九六頁）が、そこにも「西欧世界に対する黒人インテリの愛憎」がにじみでており（九八頁）、それが文化変容の問題に関して「われわれは同化されるのではなく、同化するのでなければならない……」という、いささか神経質なまでの自我の主張をかれらになさせている（一〇一頁）のである。こうした自我の主張が政治にあたえた影響を、マルクス主義を例にとっていえば、「マルクス主義の理念はパン・アフリカニズムの前衛の思想に大きく貢献し、その指導者のなかにはマルクス主義者がかなりいるにもかかわらず、……かれらは一様に国際共産主義とモスコーの指導を拒否している」（一〇四頁）のである。こうした態度は詩人でもありマルクス主義者でもあるエメ・セゼールの「わたくしは植民地問題を、ある種のより重要な世界的規模の問題に従属したものとしてとりあつかうことをこのまない」という言葉によってより明確に示されている（一〇六頁）。ついで第七章では、現代のアフリカにおけるいくつかの政治理念がとりあげられるのであるが、ここでは簡単に項目だけをひろっておくにとどめる。――ノン・アラインメント、アフリカの個性、ネオ・コロニアリズム、アフリカン・デモクラシー、一党国家、民主主義的中央集権主義、アフリカの法と正義、アフリカの社会主義とマルクス主義。

さて、第八章で著者は、わずか二頁ほどの結論をもってかんたんに本書をしめくくる。著者によれば、パン・アフリカニズムがアフリカに移植されて四年、運動は発展とともに分裂的傾向をつよめてきたが、このばあい争点はあくまでも「統合の方法」にあるのであって、「統合への欲求」は以前にもましてつよいものをもっている。アフリカの基本的問題を解決する道は、すべてパン・アフリカニズムに通ずるのである。その意味で「パン・アフリカニズムは反植民地主義闘争の段階でその限られた政治的役割をおえ、いまや生命力をうしなってしまった」という一部の論者には賛成しがたい、と著者はのべている。

三　本書の概要は以上のごとくであるが、まずその引用文献の豊富さに敬意を表さなくてはならないであろう。かくて著者の意図した客観的記述は、資料的にも十分に裏うちされたのである。このことは、本来極めて漠とした「理念と情緒の運動」であるパン・アフリカニズムを、多角的手法をもってかなり明確にえがきだしたこととともに、本書をたんなるガイド・ブック以上のものにするのに役立っている。このほか本書がもつ意義については内容紹介にさきだってふれた通りであるからあえてくりかえさないが、第二部―附編に収録された一四六頁にものぼる尨大な関係資料をも含めて、パン・アフリカニズム関係の著書がとりわけ少い現状においては、本書の価値は大いに高いものとされなければならない。

（小田英郎）